



## 『宋書』における謝靈運「臨終詩」の解釈について

著者	稀代 麻也子
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	60
ページ	13-24
発行年	2002-06-29
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00150368">http://doi.org/10.15068/00150368</a>

# 『宋書』における謝靈運「臨終詩」の解釈について

稀代麻也子

はじめに

謝靈運には、沈約『宋書』卷六十七に「臨死作詩曰（死に臨み詩を作して曰く）」として引かれ、『広弘明集』以降、「臨終詩」と称されている作品がある。その生涯の最後に作ったということから、この作品には多くの研究者が触れている。大部分は靈運に仏教的救いがあつたか否かに主たる関心があるようである。ところが、『宋書』という作品の中において改めて読み直してみる時、「臨終詩」は死をどう受け容れるかではなく、生きることを力強く肯定する作品としてたちあらわれてくるように思える。本稿の目的は、死の側から書かれていべき作品を『宋書』では生の側から読もうとしていること、すなわち、作品性が引用者の処理の仕方によって転換し得るということをも、謝靈運「臨終詩」の解釈をめぐる考察することにある。

「臨終詩」は、謝靈運が最期に救われたのかどうかという点で意見がわかれている。その原因はこの作品に異同が多いことにあるが、とりわけ重要な違いは後半部分にある。そこではテキストによって句の順番が入れ替わっており、さらに最後に解釈の違いを生み出す主たる原因と思われる二句が加わる場合があるのである。そこで、以下に「臨終詩」の全文をあげる。『宋書』の謝靈運伝に引用された十二句のうち、解釈に大きな違いを齎さない最初の八句は次の通りである。〔『広弘明集』卷三十と文字に異同があるものには傍注を附す。〕

- 01 龔勝無余生龔勝に余生無く
- 02 李業有終尽李業に終尽有り
- 03 嵇公理既迫嵇公は理もて既に迫り

04 霍生<sup>子</sup>命亦殞

霍生も命もて亦殞く

05 悽悽<sup>後</sup>凌霜<sup>葉</sup>

悽悽たり霜を凌ぐ葉

06 網網<sup>納</sup>衝風<sup>納</sup>菌

網網たり風に衝かるる菌

07 邂逅<sup>無時</sup>竟幾何

邂逅竟に幾何ぞ

08 修短非所慙

修短は慙む所に非ず

詩を解釈する上で大きな問題となるのは、09以下である。

『宋書』では次のようになってい

09 送心<sup>正</sup>自覺前

心を送る自覺の前

10 斯痛久已忍

斯の痛み久しく已に忍ぶ

11 恨我君子志

恨むらくは我が君子の志

12 不獲<sup>得</sup>嚴上<sup>得</sup>浪

嚴上に浪ぶを獲ざるを

一方、明以降に輯められた總集・別集が基本的に従っている『弘明集』では、『宋書』の09以下にあたる部分に違いがある。便宜上、句頭に冠する番号は『宋書』に引かれた句順に基づき、『宋書』にない二句は「\*\*」で表す。

11 恨我君子志

恨むらくは我が君子の志

12 不得嚴上浪

嚴上に浪ぶを得ざるを

09 送心正覺前

心を送る正覺の前

10 斯痛久已忍

斯の痛み久しく已に忍ぶ

\*\* 唯願乘來生

唯だ來生に乘じ

\*\* 怨親同心朕

怨親心の朕を同じくするを願ふのみ

この作品の解釈の方向を、「來生」という言葉を糸口にして考察する。

謝靈運と共に劉義真とつながりの深かった釈慧琳に「白黒論」（均善論）があり、「來生」に関する議論もみえる。「來生」などという考え方は方便であつて今の生こそが大切なのだと結論づけているのだが、『宋書』（卷九十七）によればこの論は仏教を貶黜するものであるとして「旧僧」の反撥を受ける一方で文帝には賞せられて、慧琳は元嘉中に重用されたという。これに従えば「旧僧」の考え方は、『弘明集』が引く最後の二句があれば「旧僧」の考え方に与して來世を信じていることになるし、なければ現世を重視する慧琳の論理と同質であることになる。また、少し時代は下るが、北周の王褒「周蔵經願文」（『弘明集』卷二十二）に「六趣怨親同登正覺（六趣の怨親共に正覺に登せんことを）」、すべての人が平等に悟りを得られますように、とある。これらを考え合わせると、『弘明集』の「臨終詩」では「正覺」という言葉と最後の句にある「怨親」という言葉が呼応して「來生」へ希望を繋げようとして発せられたものであることになる。このような読みを導く『弘明集』の引用は、『宋書』にいう「旧僧」的立場に通じるものであるといえる。

ところで今、先行文献をいくつか挙げてそれらが『宋書』に従っているのか『広弘明集』に従っているのかを確認すると、次のようになる。『宋書』に基づいて正文を引用しているものとして、顧紹柏（『謝靈運集校注』中州古籍出版社、一九八七年八月）、船津富彦（『中国の詩人3謝靈運』集英社、一九八三年五月）、小尾郊一（『謝靈運——孤独の山水詩人』汲古書院、一九八三年九月）、後藤秋正（『中国中世の哀傷文学』研文出版、一九九八年一〇月）牧角悦子（『謝靈運詩考——刹那と伝統』九州大学文学部『文学研究』八四、一九八七年二月）がある。一方、『広弘明集』に従って正文を引用しているものとして、黄節（『謝康樂詩註』卷四）、大上正美（『中国古典詩聚花4思索と詠懷』小学館、一九八五年九月）、鍾優民（『謝靈運論稿』齊魯書社、一九八五年一〇月）、森野繁夫（『謝康樂詩集』白帝社、一九九三年九月）がある。このうち顧紹柏と鍾優民とを除き、他はすべて、謝靈運が来世を信じた（あるいは信じようとしていた）か否か、ということに何らかの関心を抱いて解釈している。従来の読み方の大多数は、「唯願乘来生、怨親同心朕」と、「来生」に思いをいたす二句をつけ加える『広弘明集』のような視点からなされているのだが、引用される字句自体は必ずしも『広弘明集』に基づいているわけではない。こ

のことから、末尾の二句があってもなくても、少なくとも実際に解釈する段階においては、謝靈運がこの詩において来世という概念をよりどころにしていると前提するのが一般的になっているといえる。「謝靈運には仏教的救いがあった」、「謝靈運に仏教的な救いはなかった」という一見正反対の解釈の方向は、実は等しく『広弘明集』に導かれた読み方なのである。これに対して『宋書』では、謝靈運の眼差しは現世の側に向けられていて、「臨終詩」は、生に向かう作品として提示されていると考えられることを以下に論じていく。

筆者の関心は解釈の優劣を決めることや、『宋書』と『広弘明集』のどちらが謝靈運の作品として本来の面目を保っているかを決めることではなく、どのように引用するかというその操作によって作品の意味する内容が転換し得るということ、すなわち引用それ自体の様相を、『宋書』の側からみていくことにある。

## 二

まず、謝靈運伝全体の構成をみる。『宋書』の本伝に引用されている謝靈運自身の作品にI—VIIを、作品の間にある記述にA—Gを冠して標題とし、『宋書』本伝自体の構

成を、重要と思われる徧激・志・文・山水といった要素に着目しつつ確認しておく。なお、篇名は便宜的に顧紹柏（前掲書）が使用しているものを使う。

## A 文

謝靈運は文章にかけては及ぶものがなかった（「文章之美、江左莫逮」）。

### I 志「撰征賦」並序

#### B 徧激

門生を殺して免官された靈運は（「坐轉殺門生、免官」）、劉裕が即位すると公の場で徧激の性をあらわにした（「性徧激、多愆礼度」）。

## 文と志

彼に文義の人としての価値しか認めない朝廷側（「朝廷唯以文義处之」）と謝靈運自身の官界で活躍したいという意識（「自謂才能宜參權要」）との懸隔。

## 文

劉義真と文籍によつて密接な関係を結んでいたこと（「廡陵王義真少好文籍、与靈運情款異常」）。

#### 徧激

少帝が即位すると実権を握った徐羨之らにたてついたため

永嘉に左遷される（「靈運構扇異同、非毀執政、司徒徐羨之等患之、出為永嘉太守」）。

## 志と山水と文

失志の中で山水の美にのめりこんでいき（「郡有名山水、靈運素所愛好、出守既不得志、遂肆意游遨」）、所構わず詩詠するようになる（「所至輒為詩詠、以致其意焉」）。やがて周囲の反対を押し切つて辞職し、始寧で隱士と交わる。彼の作品は都で絶大な人気を誇つた（「每有一詩至都邑、貴賤莫不競写、宿昔之間、士庶皆徧、遠近欽慕、名動京師」）。このような中でIIが書かれる。

## II 山水と文「山居賦」並序、注

### C 文

文帝が即位して徐羨之らが誅されると謝靈運は秘書監となつたが、あくまでも文義の人としてしか扱つて貰えない状態（「使整理秘閣書、補足遺闕」、「令撰晋書」）に不満を抱き、仮病を使つて仕事を休み、度を越した遊び方をするようになる。文帝の計らいによつて自分から休暇を願ひ出る形で始寧に帰ることになり、出発前にIIIを書く。

## III 志「勸伐河北書」

### D 文と山水

始寧でも遊び呆けて免官された彼は、四友と山沢の游をな

した（「以文章賞會、共為山沢之游」）。

## 山水

どんな山でも踏破しないことがなかった（「尋山陟嶺、必造幽峻、巖嶂千重、莫不備尽」）彼が山水を跋涉するその様はまるで山賊のようであった。山道は危険だからと行く手を阻もうとした王琇に対してIVが作られる。

## IV 山水「贈王琇」

## E 編激

実は謝靈運は、熱心に仏教を信仰する太守の孟顗をばかにして（「生天当在靈運前、成仏必在靈運後」）恨みを買っていたのである。山賊騷動があつた後も謝靈運と孟顗は干拓事業を巡って対立する。孟顗に讒言された靈運は身の潔白を証明するためにVを書く。

## V「自理表」

## F 編激

文帝の理解を得るものの、臨川に左遷される（「知其見諶、不罪也。不欲使東帰、以為臨川内史」）。臨川でも永嘉の時と同じように遊んでいた（「在郡不異永嘉」）ために糾弾される。逮捕してきた人物を逆にとらえて、謀反を決意し（「興兵叛逸、遂有逆志」）、VIを書く。

## VI 志「臨川被収」

## G 文

追つ手に逮えられたが、靈運の才を愛する文帝は免官ですませようとする（「廷尉」論正斬刑、上愛其才、欲免官而已）。しかし劉義康が恕すべきではないと譲らない。文帝のとりなしで死一等を減ぜられるものの、広州左遷がきまる。その途上、謝靈運がならず者を集めて謀反を企てていたとまことしやかに証言する者があらわれ、棄市が決まる。刑死に臨んでの作がVIIである。

## VII 志「臨終」

## H 文・志

龔勝・李業と張良・魯仲連に託された意味が同じであること（「詩所称龔勝・李業、猶前詩子房・魯連意也」）、卒年、文章が世に伝わったこと（「所著文章、伝於世」）、子の鳳が夭折したことなど。

政治的に成功したいという謝靈運の志は、二大要因によって阻まれる。一は朝廷が彼に求めていたのが政治的な能力ではなく文義であつたこと、一は彼の編激の性が政治の場における人間関係に亀裂をもたらしてしまうこと、である。志は空転し、文義だけが靈運を靈運たらしめるという鬱屈した状況の中で、彼は自分の憤懣を編激性を伴った山

水への没入と、それを作品に結晶させることで発散するしかない。朝廷から文義だけを求められることに不満を抱きながら、その不満を文によって解消する。『宋書』の本伝で謝靈運は、自身が望んだ政治家としてではなく、あくまでも文学者として描かれる。

次に本伝以外をみると、謝靈運が「褊激」の人として描かれることが圧倒的に多いことがわかる。たとえば、卷三十の五行志に「民間謡曰、『四人挈衣裾、三人捉坐席』（民間の謡に曰く、『四人衣裾を掣り、三人坐席を捉る』）」とあるが、これは才能に任せていつも取り卷きを引き連れて闊歩している謝靈運が将来刑死することをいいあてたものとして引用されている。卷四十二には、謝靈運が痴情の鏈れから殺人を犯したことに對する王弘の弾文が引かれ、これに関連するものとして王准之が謝靈運の殺人の罪に坐したことが、卷五十七蔡廓伝と卷六十王准之伝にみられる。また、卷四十三檀道濟伝に謝靈運刑死三年後の元嘉十三年（四三六年）、謝靈運を「志凶辞醜（志凶にして辞醜し）」と罵倒する詔が引かれる。他に、「謝靈運は知識は豊富だけれども自分を抑えることができない」という謝混の言葉も、卷五十八謝弘微伝に引かれる（「阿客博而無檢（阿客は博なれども檢無し）」）。

褊激とは対極にある人物に對する謝靈運の憧れを垣間見せるものとしては、羊欣伝（卷六十二）や王弘之伝（卷九十三）に引かれた謝靈運の言葉があり、謝靈運を文義の人として把握しているものとしては、謝惠連伝（卷五十三）と顏延之伝（卷七十三）の記述がある。

以上、『宋書』においては謝靈運が、褊激の生と志の狭間で言葉を紡ぎ続けるしかなかった表現者として描き出されていることをみてきた。

次章では、沈約の意図に沿って、つまり彼が『宋書』の読者に読ませようとした方向で、謝靈運の「臨終詩」を具體的に解釈してゆく。

### 三

「臨終詩」の冒頭四句にうたわれている人物は、何れも正統ではない権力に對抗して命を落とした人々であり、この四人の運命を謝靈運が自らの運命と重ね合わせたことは疑いない。しかし、人生の最後にあたって自らを重ね合わせるのに選ばれたのが伯夷でも叔斉でも稷康でもなく、なぜ龔勝・李業・嵇紹・霍原でなければならなかったのか。そのことを考える時、「権力に抵抗して死んでいった人々」という要素だけに着目する読み方では、「已に久しく忍」

んでいた「痛」みや、「巖上に涙」ぶことが叶わなかった  
「恨」みの様相が曖昧になってしまふのでないだろうか。  
そこで、抵抗して死んでいった数多の歴史上の人物の中から  
選ばれた四人について以下でみていきたい。

王莽を認めずに絶食した龔勝（『漢書』卷七十二、公孫述に仕えるか毒を選ぶか迫られて毒を選んだ李業（『後漢書』卷八十二）、この二人は自らの信念に従って死んでいった。ところで、『抱朴子』には、二人の潔さを称えるというのではなく、目に見える足跡を残してしまつて完全に影を消し去ることができなかったことの方に関心を寄せる見方が載っている。山奥に逃れながら陸で波に吞まれるように、或いは水の中で焼かれるようにして殺されていった古人の例としてこの二人が並びあげられているのである。

若龔勝之絶粒以殞命、李業煎燼以吞配。

（龔勝の粒を絶ちて以て命を殞とし、李業の燼を煎くして

以て配を吞むが若し。）

（外篇「知止」）

自分の迹をくらまそうとしてそれに失敗した彼等を、『抱朴子』では「知止」の章、すなわち溢れる程の気持ちをもちながら空虚なように暮らすのが万全の策であるということとを述べようとした章で持ち出している。溢れる気持ちを抑えきれなかったために死んでいった『抱朴子』の龔勝や

李業の姿は、褊激の性を抑えきれずに殺されていった『宋書』の謝靈運の姿と深く通じるものがあるといえないだろうか。

嵇紹は惠帝を守つて敵の刃に倒れた（『晋書』卷八十九）。彼は「以正伐逆、理必有征無戰（正を以て逆を伐つ、理は必ず征有りて戦無し）」と、「理」をもつて惠帝のもとに馳せ参じた。

霍原は王浚に従わずに恨まれて殺された人物である（『晋書』卷九十四）が、興味深いのは、彼が権力に迫いつめられて行く様子である。

（霍）原山居積年、門徒百數。王浚称制謀僭、使人問之、原不答、浚心銜之。又有遼東囚徒三百余人、依山為賊、意欲劫原為主事、亦未行。時有謠曰、「天子在何許、近在豆田中」。浚以豆為霍、收原斬之。

（原山居すること積年、門徒百數あり。王浚称制して僭を謀り、人をして之に問は使むるも、原答へず、浚心に之を銜む。又遼東に囚徒三百余人有り、山に依りて賊を為さんとし、意に原を劫して主事と為さんと欲するも、亦未だ行はず。時に謠有りて曰く、「天子は何許に在りや、近く豆田の中に在り」と。浚は豆を以て霍と為し、原を収めて之を斬る。）



権力者に睨まれて身に覚えのない言いばかりをつけられて罪人に仕立て上げられ、理由をつけて殺されたのが霍原という人物であつた。これは、『宋書』に描かれている謝靈運の姿と奇妙に重なりあう。謝靈運も始寧で「義故門生數百、鑿山浚湖（義故門生數百、山を鑿ち湖を浚ふ）」という生活をしていた時に太守の孟顗に睨まれ、誣いられて臨川に左遷された。そこでも兵を興さざるを得ないように追いつめられ、広州に流される時に「謝靈運はならず者と語らつて事を起こそうとしていた。今回それらの連中が謝靈運奪還を計画したが頓挫して食うに困り強盜を働いていた」という「事実」の証言が得られたとして、棄市の刑が確定したのである。

この詩の中で、文字の問題で意味がとりにくくなっているのが「網網」である。「衝風菌」の状態を示していることは明らかなのだが、「網網」という文字には適切な先行例がなさそうである。そこで、この部分を「広弘明集」に従つて「納納」に改めて考えることが多い。「納納」であれば、『濡濕貌』（『楚辭』九歎の王逸注）であつて「菌」の形容として通じるからである。しかし本当にそのように考へていいのだろうか。この場合問題となっているのは重言であるから、文字の偏旁まで一致させることにこだわらず

ぎる必要はないのではなからうか。勿論テキストの文字を安易に改めることは敵に愼むべきではあるが、もしも「方冊紛綸、簡蠹帛裂、三写易字（方冊紛綸し、簡は蠹ひ帛は裂け、三たび写せば字を易ふ）」（『文心雕龍』練字）、テキストが乱れ、虫くいや破損によつて三度も転写されると文字がすっかり変わつてしまうことがあるという記述を援用することが許されるならば、筆者は「網網」は「惘惘」であつて、『文心雕龍』がいうところの「或以音訛（或ひは音を以て訛す）」、発音によつて変わる場合にあたるのではないかと考えたい。「網」も「惘」も上声三十六養韻で、『広韻』ではともに「文兩切」、小韻まで同じだからである。同じように「懷」と「凄」はともに上平十二齊韻で「七計切」だから紛れることがあり得る。

そうすると、無実の罪を悲しむ『楚辭』九章の「悲回風」に次のようにあることが重要になつてくる。

涕泣交而淒淒兮、思不眠以至曙。

（涕泣交はつて淒淒たり、思ひて眠られずして以て曙に至る。）

撫珥衽以案志兮、超惘惘而遂行。

（珥衽を撫でて以て志を案へ、超として惘惘として遂に行く。）

「超惘惘而遂行」は王逸の注に「失志惶遽而直逝也（志を失ひ惶遽して直ちに逝く也）」とあることから、志を遂げられずに失望している状態をあらわしていることになる。

「凄凄」、「惘惘」の二語を用いることによって、失志の深い悲しみがイメージとして湧いてくるのである。「悲回風」は讒人に陥れられた無実の罪を悲しむ言葉で始まり、志高きが故に害せられることが述べられていて、謝靈運の運命と重なりあう。同じく「悲回風」の「介眇志之所惑兮、竊賦詩之所明（介たる眇志の惑ふ所、竊かに詩を賦して明らむる所なり）」という、志が讒人にはばまれて遂げられない惑いを作品に託して自分の心の内を表現するのだという決意は、孟顗に誣いられた謝靈運が「自理表」を書いたことと重なる。また、「憐思心之不可懲兮、証此言之不可聊（思心の懲る可からざるを憐れみ、此の言の聊くもす可からざるを証す）」、何があつても志を曲げない自分の頑なさを、それでも肯定して受け容れ、それを証明しようとする強さは、以下にみていくように「臨終詩」の、特に後半 09-12 に通じるものである。

「自覚」という言葉は、『孔子家語』（巻二）に出てくる。孔子が斉に行った時、哭している者がいた。強烈な哀しみであつたが、喪の場合とは違うことを不思議に思つた孔子

がその故を訊ねると、丘吾子は「吾有三失。晩而自覚。悔之何及（吾に三失有り。晩にして自ら覚れり。之を悔ゆれども何ぞ及ばん）」と答える。「三失」とは、学が役に立たなかつたこと、臣節が遂げられなかつたこと、親しい人との別れ、であつた。そして、「夫樹欲静而風不停（夫れ樹は静ならんと欲するに風停まず）」と、静かであろうとする自分がついに静かではありえなかつたことをなげく。丘吾子が死を前にして発した「自覚」という言葉は、現実を正面からみつめる、その眼差しを示すといえよう。

以上の考察に基づいて「臨終詩」を訳すと、次のようになる。

龔勝は王莽を認めずに絶食して死に、李業は公孫述に仕えるか毒を選ぶか迫られて毒を飲んで死んだ。嵇紹は理を通そうとして恵帝を守つて敵の刃に倒れ、霍原は王浚に従わずに恨まれて殺された。苦しい状況の中にあつて志を果たそうとした彼等の姿は、風霜に耐える植物のように健気であつた。しかしその思いはついに報われることはなく、彼等は失志の深い悲しみの中で死んでいったのである。志を遂げようとする行為の気高さの前にあつては、よき人に巡り会えないことも命を絶ちきられることも大したことでは

はない、そう考えもするのだが。現実をしつかりと見据えてきたからこそ、私は長いあいだ痛みに耐えなければならなかった。君子の志を持つ自分は厳上で命を全うすべきであるのに、志の高さゆえにそうならないのだ。このパラドックスが恨めしい。

ところで、靈運が叛逆を決意した時のVI「臨川被収」は、次のような詩である。

韓亡子房奮 韓亡ぶや子房奮ひ

秦帝魯連恥 秦帝たらんとするや魯連恥づ

本自江海人 本自り江海の人

忠義感君子 忠義君子を感じしむ

「国を滅ぼされた恨みを雪ぐために始皇帝を殺そうとした子房（張良）、趙に滞在していた時にその氣迫で秦を退かせた魯連（魯仲連）、心を江海に馳せていた彼等の忠義は君子たるものの共感と呼び起こした」というものだが、『宋書』では「臨終詩」を引いた直後に「詩所称龔勝・李業、猶前詩子房・魯連意也（詩称する所の龔勝・李業は、猶ほ前詩の子房・魯連の意のごときなり）」とわざわざ断っている。確かにこの四人は志を貫く行動をとった忠義の士であるという点で共通する。しかし、両者には決定的な違い

がある。張良と魯仲連は、忠義の行動によって死に至ってはいないのである。張良は後に劉邦に仕えて晩年に「願弃人間事、欲從赤松子（願はくは人間の事を弃て、赤松子に従はんと欲す）」（『史記』卷五十五）と仙人に対する憧れを表明しているし、魯仲連は平原君のもとを去り、最後には「逃隱於海上、曰『吾与富貴而黜於人、寧貧賤而輕世肆志焉』（海上に逃隱し、曰く『吾富貴にして人に黜けられんよりは、寧ろ貧賤にして世を軽んじ志を肆にせん』と）」（『史記』卷八十三）と、文字通り江海の人となっている。謝靈運が謀反を決意した時点の張良・魯仲連と、刑死寸前の龔勝・李業との間に『宋書』が共通性を見出しているということ、古人にこめられた思いの中心が死忠ではないということである。断り書きをせずに詩だけを提示しておけば、読者は自然に龔勝・李業・嵇紹・霍原に共通項を見出し、『臨終詩』のモチーフとして死忠を読み込むことになる。ところが沈約の示した対比によって、「君子」を感じさせているのが「君子志」であること、その「志」は、張良においては始皇帝を激怒させるような行動、魯仲連においては秦軍を退却させるような氣迫としてあらわされ、龔勝においては自ら絶食して死ぬこと、李業においては自ら毒を選んで死ぬこととして示された。志を貫こうとするこの四

人の行動は主体的で、極めて激しい。このような提示の仕方を含め、『宋書』の文脈に沿って「臨終詩」の意味するところを更に深く考えれば、次のようになろうか。

「龔勝と李業は自分の志のもつ激しさを抑えきれなかったために死んでいった。嵇紹は己の「正」を信じ抜き、霍原は小人に従わなかった。じつと苦しみに耐えて志を守ろうとした古人の凛とした姿は美しい。しかし気高い精神は報われず失志のなかではかない命を閉じるほかなかった。彼等は運命など心にかけなかったに違いない。よき時代よき人に巡り会えるかどうかは自分の力ではどうにもならないことだ。そういう力で外から命を断ち切られてしまう場合、その責任は自分にはない。しかし、本当に志を貫くためには、張良や魯仲連のように生き続けなければならぬ。だから私はずっと現実から眼をそらさずにしつかりみつめようとしてきた。己の志と外部の圧力との激しい相剋、決して譲れない自分とそれを許さない外部との軋轢の中で、際限のない痛みが私を言葉へと駆り立てた。残念なことに、君子の志は小人の迫害を呼び込みやすい。魯仲連や張良に共感した私は、しかし彼等のように自分の抱え持つ激しさをコントロールして迹をくらすことがついにできなかった。君子の志を持つ者は、誰からも制約を受けず

に巖に棲んで「自得以窮年（自得して以て年を窮む）」（「山居賦」）べきである。しかし志を通そうとすればその志を排除する力が介入する。私の性質は私の自由を阻む力に冷静に対処していくには激し過ぎたのだ。しかし私は決して後悔はしていない。何故なら、私にこれ以外の生き方はあり得なかったのだから。」

死を前にしてすら現世における自分の正当性を訴え続け、最期まで来世に救いを求めることをせず死に向かう観点をもたなかった謝靈運の資質は、『宋書』に引かれる「山居賦」で既に暗示されていた。「好生之属、以我而觀（好生の属は、我を以て觀る）」と生きることとを力強く肯定していた彼の「猜害者恒以忍害為心、見放生之理、或可得悟（猜害者は恒に忍害を以て心と為すも、放生の理を見れば、或ひは悟りを得るべし）」（自注）、狩獵する者の残忍な心も、生きるということの素晴らしさがわかれば変わるかもしれない、という願いは遂に叶えられなかったが、「少好文章（少きより文章を好む）」（自注）と、若い頃から文章を好んでいた彼にふさわしく、最期まで自分の志の正しさを確信し、それを作品として提出したのである。

このような読み方は、『広弘明集』の引用に従って読んだ場合と全く異なった方向を示すものである。『広弘明集』

におけるこの詩の主旨は「昔から志を守って死んだ人達がいた。夭折は仕方のないことなのだ。ただ、法蔵を結集して満足して山で死んでいった摩訶迦葉のようになれなかったことが心残りだ。結局、悟ろうとして悟れない一生であったが、来世ではせめて安らかでありたいものだ」であり、来世に思いを寄せる文脈となり、死の側から発せられた言葉であることになるからである。

### おわりに

「恨我君子志、不獲巖上浪」という結びは、決して自分の今までの生き方を後悔するものではない。『宋書』の「臨終詩」は自分の生を力強く肯定するものであって、来世を夢見て人生を清算し切り捨てようとするものではないのである。この詩を、沈約が理解し、その理解に従って列伝中に位置づけたように読めば、あくまでも自分の志を貫いた偏激の表現者が、苦しみまで含めて丸ごと自分の一生を受け容れていたことを示す作品として、解釈の可能性を広げるのである。

### 注

① 沙門を代表する黒学道士が「若不示以来生之欲、何以權其当

生之滞」と言ったことをうけて、「中国聖人」である白学先生は「豈得以少要多、以粗易妙、俯仰之間、非利不動、利之所蕩、其有極哉。……周・孔敦俗、弗聞視聽之外」と答え、また、「天道之以仁義者、服理以從化、帥之以勸戒者、循利而遷善。故甘辞興於有欲、而滅於悟理、談說行於天解、而息於貪偽。是以来生者、蔽虧於道、積不得已」と言っている（『宋書』卷九十七夷蛮伝）。

② 趙欽なる人物の「証言」は以下の通りである「同村薛道双先与謝康樂共事、以去九月初、道双因同村成国報欽云『先作臨川郡、犯事徙送広州謝、給錢令買弓箭刀楯等物、使道双要合郷里健児、於三江口募取謝。若得者、如意之後、功劳是同。』遂合部党要謝、不及。既還飢饉、緣路劫盜」。

（青山学院大学大学院）